応用心理学と応用心理学会はどうあるべきか

機関誌編集委員会

日本応用心理学会では、2007年度より学会年次大会時に企画実施されたシンポジウムやワークショップ、 講演などの中から、本学会または応用心理学の発展に寄与するもの数点を推薦し、企画者の同意を得て機関誌 『応用心理学研究』にその概要を掲載することになった。

今回は、日本応用心理学会第74回大会(帝塚山大学)で企画実施された「自主企画ワークショップ」1点、日本心理学会第71回大会(東洋大学)で企画実施された「ワークショップ」1点を取り上げることになった。二つのワークショップの発表者は、すべて日本応用心理学会の会員であり、両ワークショップの内容が本学会の組織や領域に関するものであるため、両企画を同一紙面にまとめて並列掲載することにした。以下が大会時のプログラムである。

◇日本応用心理学会第74回大会「自主企画ワークショップ」

日 時 2007年9月9日(日)12:30~14:30

会 場 帝塚山大学

テーマ 日本応用心理学会の過去・現在・未来を語る

企 画 者 藤田主一(日本体育大学)

司 会 者 浮谷秀一(東京富士大学)

話題提供者 大村政男(日本大学) ………過去を語る

話題提供者 荻野七重(白梅学園短期大学)…現在を語る

話題提供者 田中真介(京都大学) ………未来を語る

指定討論者 内藤哲雄(信州大学)

指定討論者 大坊郁夫 (大阪大学)

大会ワークショップの企画趣旨

日本応用心理学会の歴史は古く、記録によれば昭和2年から関西地区で応用心理学の研究会が継続して開かれ、また同様に昭和6年から応用心理学会の会合が東京で継続的に開かれた。そして昭和9年4月、東西の応用心理学会の合同第1回大会が京都帝国大学を会場にして開催され、以後の(日本)応用心理学会大会は4回を数えた。戦争による中断の後、復興第1回大会が早くも昭和21年に開かれて以来、日本応用心理学会は60周年の節目を迎えた。輝かしい歴史と伝統を礎に発展してきた本学会の過去と現在を知り、未来を展望するよい機会の到来である。

◇日本心理学会第 71 回大会「ワークショップ」

日 時 2007年9月19日(水)10:00~12:00

会 場 東洋大学

テーマ 心理学の応用はいかにあるべきか

企 画 者 藤田主一(日本体育大学)

司 会 者 浮谷秀一(東京富士大学)

話題提供者 大村政男(日本大学)

話題提供者 内藤哲雄(信州大学)

話題提供者 垣本由紀子(立正大学) 指定討論者 細江達郎(岩手県立大学) 指定討論者 林 潔(白梅学園短期大学)

大会ワークショップの企画趣旨

二つのワークショップの話題提供者、指定討論者に当日の発表内容の概要を投稿原稿の形にまとめ直していただき、以下の論文を受稿することができた。また、執筆内容は話題提供や指定討論の役割に限定せず、発表者がこれまでに思考してきた本学会のあり方や応用心理学の研究方法などについて自由な立場から加筆していただいた。限られた紙幅のため十分な論考ができなかったかと思われるが、会員の皆様にはこの点を前提の上で、ご一読をお願いしたい。なお、両ワークショップに参加している発表者には、その発表内容を一つの論文にまとめるようにお願いした。

応心、もっと考えませんか?

大村政男 (日本大学)

I 応用心理学の自律性 昭和2年4月7日から11日の5日間、東京帝国大学構内の法医学教室で日本心理学会第1回大会が開催されている。正確にいうと、この初日に「日本心理学会」が成立したのである。11日は見学日で、警視庁、豊多摩刑務所、中央電話局の3カ所に分かれて行ったという。口頭発表は66件(取消4件)である。発表のなかに東京帝大の淡路圓次郎(当時33歳、文学部研究事務嘱託・立教大学/日本大学講師)が「応用心理学のAutonomie について」を発表している。Autonomie は英語の autonomy で、自律性と訳される。淡路は次のように述べている。当時の卓見というべきである。

心理学の応用と応用の為の心理学とは、厳密に区別しなくてはならぬ。応用心理学は決して理論心理学の研究結果の直接の実際的適用をば任務とするものではない。その実際的適用の基礎たるべき一種の理論的体系である(後略)。

II nomothetic か idiographic か 前者は法則定立的,後者は個性記述的と訳されている。「科学は個人的なものではない (Scientia non est Individuorum)」のである。大学で「心理学」を講義するひとは,「心理学は科学である」とか「心理学は人間性の科学である」とかいう。それでは「科学」とはなにか?ということになると判然としていない。ただ,心理学はさまざまな領域で「纏まった結果」を得ようとする。nomotheticへの大傾斜である。そのときに利用されるのが統計法である。

心理臨床は idiographic なスタンスを持っている。大学や大学院で nomothetic な学問を勉強して現場で特殊な個人の問題に対処する。カウンセラーはそれを営業にしている。冒険である。

III 記述統計と推測統計 前者は収集したデータの特徴についての記述である。田中寛一の『教育的測定法』(松邑三松堂 昭3)は、この時代の代表的な書物である。この書物では、代表値(平均値・中央値など)、平均錯差、標準偏差、四分偏差(四分領域)などの算出法や2群の差の蓋然誤差を利用した検定法が記述されている。現在、記述統計に拠って研究している人はいないと思うがどうだろうか。

現代は推測統計の時代である。この分野における

先達は『少数例の纏め方と実験計画の立て方―特に 臨床医学に携わる人達の為に―』(河出書房 昭 24) の著者増山元三郎であろうか。最近では山田剛 史と村井潤一郎による『よくわかる心理統計』(ミネ ルヴァ書房 平16) がある。かれらは、推測統計と は「(収集されたデータの) 背後に広がる大きな世界 を知ることである」といっている。ただ、かなり以 前から推測統計の技法は乱用されている。レフリー ペーパーにも平然と掲載されているから不思議であ る。2群の \bar{x} の差の有意性をp < .001とか、p <.0001といったような驚天動地の危険率で裏づけた り、相関係数 (Pearson or) の信頼性を表示する数 値を相関の強さを示す数値に転用したりしている。 ほんのわずかではあるが、学術誌から実物を引用し てみよう。被験者は大学生 271 人 (男性 191 人, 女 性80人)。調査は講義時間中に集団で一斉に実施 (略)。抑うつ感情の分析:現実自己と理想自己のズ レで有意な正の相関が得られた。r=.27 p<.0001。これはズレが大きいほど抑うつ感情が高い ことを示している。この結論は出鱈目である。

IV 推計学の欺瞞性 推計学的技法の源流は農作物の栽培実験である。そこで考え出されたt検定やカイ自乗検定が心理学ばかりでなく,医学や薬学の領域における実験にも適用されている。平均気温が3° か4° 上下したら稲も玉蜀黍もたいへんである。TaylorのMASの2 群(男性N729, \bar{x} 14.33, SD7.79 vs 女性N102, \bar{x} 17.80, SD6.05) における \bar{x} を比較したところ,p<.05 で帰無仮説を棄却することができた。しかし,2 群のポリゴンを描いてみると,そのオーバーラップは広大である。とてもこの検査において男性<女性を一般化することはできない。新薬の効果判断もこれと同じなのである。応用は多くの危険性をはらんでいる。

V テストのテスト 学会発表でしばしば使われている「YGテスト」は昭和31年ごろに標準化されたもので、谷嶋喜代志たちによってその基準が現代に適用できないことや、因子構造が辻岡論文のとおりではないことが指摘されている(日心59回大会論文集)。さらに可笑しいのは、19・31・103の3間が密かに別なものになっているのである。平成19年を象徴する文字は「偽」だったが、心理学の世界にもそれがあったといえる。探索すれば偽作はまだある。応用心理学の自律性を構築するには良心も必

要である。

応用心理学会の現在 一応用心理学会の弱点を利点に一

荻野七重(白梅学園短期大学)

応用心理学会には、かつて教育心理学部会、産業心理部会、犯罪心理部会、臨床心理部会などいくつかの部会が存在した。しかしそれらの部会は、やがてそれぞれの専門学会へと分化していった。では応用心理学会からこれらの領域がなくなったのかといえばそうではない。今も続いている。現在このように、多領域の心理学が一つの学会の中に包含されている学会は、日本心理学会や大学が基盤となって構成されている学会を除いては、今や応用心理学会のみと言えるのではないか。そのため、応用心理学会に参加するとさまざまな領域の研究や話題に接することができる。

学問が進むほど、研究は細分化し、専門化し、全体がとらえがたくなる。専門馬鹿という言葉があるが、昨今その傾向は進む一方ではないか。応心について語るときに日本心理学会のことを引き合いに出すのはいささか奇妙な感がないではないが、基礎から応用まで、すべての心理学領域を包含するという意味では日本で最大の学会は日本心理学会である。多くの心理学者は、日本心理学会と他の専門学会に所属するのが一般的である。しかし最近の若い研究者は、専門学会のみに所属する傾向があると聞く。それでは人間を全体としてとらえる機会が失われてしまう。

専門学会が特定領域の研究を深めるのに適した学会であることは事実であるが、応用心理学会の利点は、さまざまな領域の研究や話題に接することができる、まさにこの点にこそあるように思う。

さて、ここで、この 15 年間の変化を、会員数、機 関誌発行、大会発表の推移に関する資料(表 1)を 概観しながら、また、事務局長や常任理事として学 会運営に関わる中で知りえたことを中心に、応用心 理学会の現在を考えてみたい。

1996年(H8年)の本学会の会員数は約900名, その前の年の約1,000名から大きく減少した。これ はその前に長期会費未納者の整理をしたことによる ものである。したがってこの年に、実質的な会員数

がほぼ確定したと考えることができる。その後徐々 に増加し、現在約1,100名の会員によって成り立っ ている。しかもこの数年はほぼこの会員数で落ち着 いている。また、この間にあった主な出来事・変化 をみてみると, 応用心理士制度が発足したこと, 学 会賞・奨励賞制度(今回学会賞に1本化され論文・ 実践活動の2部門となる)が設けられたこと、国際 交流委員会の発足により、 海外への学会からの発信 が行われるようになったこと, 研修委員会, 広報委 員会、倫理綱領作成委員会が発足し、ホームページ が開かれ,大会時に研修会が設けられ,倫理綱領が 作られたこと, そして最大の変化として, 学会の会 長には大会委員長がなるという会則により1年ご とに会長が交代していた制度が改正され、3年任期 の理事長制になったこと、さらには会員による理事 選挙制度が発足したこと、を挙げることができる。 そうした意味では, 応用心理学会にさまざまな新し い風が吹き始め、活動も活発になったといえるので はないかと考えられる。しかし、順風満帆で進んで いるといえるかどうかはいささか疑問である。例え ば、1996年の「応用心理学研究 Vol. 22」から、機 関誌は年2巻の発行と決まった。ところが、この年 から掲載論文の数が減少し、2001年を待ってよう やく2巻の発行を実現するに至ったのである。他の 諸学会に先駆けて英文論文の掲載を可能にしたこと は進展であるといえるが、「応用心理学研究」への投 稿論文数はあまり多くない。本年度始めに機関誌編 集委員会は、総説・原著・資料に短報や実践報告を 掲載することを可能にするという新しい方向を打ち 出した。また、学会賞・奨励賞は、"該当者なし"と いう状況が続き、やはり、制度の見直しをすること になり、その内容を改め、2年に一度の授与に切り 替えることになった。

今、学会会長が3年任期の理事長となり、事務局体制も外部委託を取り入れた新しい方法に変わり、委員会の整理統合も着々と進められている。この約10~15年は、学会運営の基盤固めの時代だったように思う。しかしながら、こうした改革を進めながら、それでも十分に活性化できない低迷の問題点はどこにあるのか、その打開策は何かを私なりに検討し、次の世代に希望を託していきたいと思う。

本学会は、ほぼ10年前、「日本応用心理学会史」 が発行されたときに、これを記念して"日本応用心 理学会の歴史と将来への期待"という大会記念シンポジウムをもった。また、「日本応用心理学会ニュースレター」の No.1 には"応用心理学の課題と展望"が最初の紙面を飾っている。このように本学会は、折に触れて、学会のありよう、あり方を自らに問いかけてきた。これは裏返せば、それだけありように対する不全感がもたれていたということではないか。上述したシンポジウムとニュースレターの中から、組織としての応用心理学会のありようについて、よい示唆を与えてくれているところをまず、紹介したい。「一つは、ニュースレター No.1」に書かれている次の記述である。

"すべての心理学的研究は応用心理学に通じる。 これは応用心理学の強みであると同時に、独自性を 発揮できない弱みであることを私たちは認識しなけ ればならない。このことの認識が、本学会の充実と 拡大への道に通じるものではないだろうか(神戸親 和女子大学教授坂野登 当時本学会会長)"。

他の一つは、村井健祐先生とともに学会史の編纂に携わってこられた鈴木祐子氏(当時日本大学大学院文学研究科)がシンポジウムの中で述べられていることである。

"1961(昭和 26)年の国会への「指導教諭設置に関する請願」を皮切りに心理学の立場から陳情や意見書提出をたびたび行い,一部は主張が受け入れられ,実現にこぎつけている。その推進力となったのは学会内に組織された「部会」や「委員会」であった。こういった活動はわかっている限りでは,1972(昭和 47)年まで続けられ,1973~78年ころを境に「外部への働きかけ」は「内部へ充実」(雑誌の刊行に代表される)へと,方向転換がはかられている。以上の問題は今回のシンポジウムのように本学会のありかたについて今後自問自答を試みるとき,その契機を提供するものといえるのではなかろうか。"

鈴木氏が学会史編纂の知見から得た見解であるから、大村先生の領分に踏み込んでしまうことになってしまうが、現状を見て今後を考えるとき、本学会の歴史の中に今後の発展と充実の方策を見ることができるのはむしろ嬉しいことでである。

学会運営の基盤がほぼ出来上がった今,次のステップは,ある意味の「部会」の復活ではないだろうか。部会は領域別,テーマ別の両方が考えられる。それこそ,領域の異なる研究者が同じテーマで連携

年度	特別講演	小講 演他	自主・ シンポ	大会 企画 シンポ	ワーク ショップ	研修会 A	研修会 B	口頭/ ポスター	一般原理	交通• 災害	発達・ 教育	感情•認知	社会 • 文化	人格	臨床• 相談	産業・ 職業	検査・ 測定	非行• 犯罪	福祉• 介護	看護	<u>=</u> +
1997		1	2	1	1			口頭	6	2	18	6	12	8	11	10	14	1		29	117
1998	1	1	3	1	3			口頭	6	6	36	7	17	8	9	9	8			27	133
1999	1			4	2			口頭	6	5	15	6	12	13	8	14	14	5	6	42	146
2000	1			4	2			口頭		5	42		14	11	18	10	7	4		19	130
2001	1		4	1	1			口頭		12	23	6	12	12	6	11	6	5	12	15	120
2002				3	2	1	1	口頭・ポス		4	20	6	9	9	16	3	8		8	16	99
2003	2	1	3	3	10	1	1	口頭・ポス		6	60		6	10	9	8	7		3	21	130
2004	1			4		1	1	口頭・ポス		2	13	6	10	7	7	11	9		7	14	86
2005	2		1	3	2	1	1	口頭・ポス			16	4	15	9	2	21	6			17	90
2006	1		1	4	5	1	1	ポスター		3	14	4	8	10	4	12	6	6	2	8	77
2007	1			1	6	1	1	口頭・ポス		7	21	11	9	8	5	14	8	5	2	13	103
計	11	3	14	29	34	6	6	計	18	52	278	56	124	105	95	123	93	26	40	2211	1231

表 1 日本応用心理学会大会発表の変化 (1997~2007) 応用心理学会 74 回大会資料 2 より

できるのが応用心理学会であろう。大会では若手研究者の支援に力が入れられている。また昨年は「応用心理学事典」が刊行された。応用心理学会ならではの内容と構成であったと思う。 表 1 は、ここ 10 年あまりの大会発表の内容を、件数をもとにまとめてみたものである。発表論文の領域分類は必ずしも正確ではないが傾向をとらえるうえで問題はないであろう。

情熱の行方

田中真介 (京都大学)

応用心理学の未来を考えるにあたって、本稿では、1)学術研究を志す集団・組織において、未来を構想する力がどのようにして形成され充実していくか。2)応用心理学は、どのような特質をもって研究問題をとらえてきたか。そして相互の信頼と尊重と期待のもとに、構成員がそれらの諸問題を学会という場で考究し、社会に貢献しようとするとき、どのような協同的・集団的な研究活動のシステム設計が必要となるか。以上の観点について発達研究の立場から仮説と試案を示し、検討の素材を提供したい。

- 1. 未来を構想する力: 幼児期から児童期の発達過程では、幼児期後期に「未来構想力」が飛躍する。この質的な飛躍のためには、①自己の人格発達に関する時間的変化の認識、②自己の人格構造に関する空間的多様性の繊細な認識、そして社会的交流活動の展開の中でこれらの諸力量が相互に連関しあい、③自己信頼性が充実することが重要となる。これらはその後、児童期から思春期に人間関係の形成力を高め、価値の保存・変換の機能の獲得を媒介として論理的思考力を形成し、社会認識を広げる。この生成連関の基本機構が、青年期・成人期の新たな未来構想力の形成・充実の基礎となると考える。まず幼児期から児童期の発達を例に述べる。
- (1) 時間的変化の認識: 4~6 歳期に自分の発達の過程を認識する力そのものが質的に高次化する。例えば「自分の赤ちゃんのとき、今、そして大人になったときの自分の姿」の描画(成長画)においては、4 歳代には自分の発達を基本的に体が量的に大きくなることと捉える傾向にあるが、6 歳前後には発達の質的な変化をとらえ、各時期の独自の特質を

認識し始める。事象の時間的変化の認識そのものが 質的に変化発展することによって,過去が新たに発 見・構成され、未来は新たに構想される。

- (2) 空間的多様性の認識: 時間的な自己の変化の認識を充実させていく過程で、5~6歳では、自分の属性を繊細に多面的にとらえ始め、例えば「自分を前、横、後ろから見た絵」(三方向画)では、5歳代で後ろ向き画、6歳前後からは横向き画を描けるようになる。横向き画は他者の視点から自己を見る力の獲得を示し、直接には自分の目に見えない事象をイメージすることができるという点で、自分の発達過程の質的変化をとらえる力と連関している。
- (3) 自己信頼性の啓培:時間的変化を認識する力と、空間的多様性を発見する力とが連関し、6歳頃には、「中間項」の認識を媒介として、自他を体の大小だけでなく多面的・多段階的・多価的にきめ細かく観察し評価し始める。また、事象の時間的な変化の認識を媒介として、自他の諸機能の形成的な自己評価ができる。さらに6歳代には、自分と相手の立場を変換することによって、自他に共通する大切な価値を見出し、それを集団の成員で互いに共有し尊重でき始める。目に見えない価値の認識は、多様な対象の中に共通の法則性を抽象する論理的思考力をもたらし、新たな未来を構想する基礎となる。では、青年期・成人期にある学会構成員の自己信頼性・相互信頼性を啓培し未来構想力を高めて学会を発展させていくためには、どうすればよいだろうか。
- 2. 応用心理学の特質と学会活動のシステム設計: 応用心理学は、基礎的な個別の心理諸学と異なる特質として、①実践性、②連関性、③社会性を重視した研究を志してきた。学会の未来を新たに構想しそれを現実のものとしてくためには、上述の基本的な諸力量の発達連関を組織し、会員の未来構想力そのものの形成・充実を援助するとともに、応用心理学の諸特質をもった研究を発展させる方向でシステム設計を行う必要がある。設計例をまとめる。
- (1) 実践性:教育・医療・労働などの生活実践場面の社会的な諸問題をとらえ、基礎的な心理学・生理学等の個別専門学の知見をそれらの諸問題の解決に活かす。さらに実践的研究の立場から個別専門学の研究内容を問い直し、新たな問題を提起する。そのためには、①研究条件の改善、特に若手研究者への生活基盤援助、②研究活動・研究成果の量でなく

特 集 (169)

実践的な問題意識の評価, ③学会活動という実践場面での力量の多様な発揮の機会と交流の場の保障が望まれる。

- (2) 連関性: 実践場面の諸問題は個別専門学の枠を越えた問題性をもつ。そのような諸問題を発見し解決していくためには、学会内の個別専門学グループを多様に組織することによって、応用心理学独自の問題を発見し解決を図る必要がある。その中で会員一人ひとりが活躍し主人公になれる場を準備し、研究的な自己信頼性の形成と充実を援助する。
- (3) 社会性: 個別心理学的な諸問題の解決にあたっても、社会的な諸問題を研究の射程にとらえ、制度や法律など社会的諸条件の改善課題まで提起する。そのためには、社会の中で最も困っている人や場へ足を運び、生活実践場面の諸問題を具体的に考究する研究が必要となる。学会の中で、基礎集団(専門家集団)の枠を越えた活動集団を編成し、会員が多彩なテーマをもつサブグループに所属し活躍し連携できるようにする。さらに、研究者が実践的に問題をとらえ、豊かな教育的諸関係の中で自らのうちに秘められた多様な潜勢力を発揮して研究できるよう、援助するシステムそのものを新たに構想し実践的に検討していくことが望まれる。

長い歴史と多様な領域を未来に活かす

大坊郁夫 (大阪大学)

「応心」は、わが国の諸心理学会の源流と言え、そして、今日の約40の心理学関連の学会を生み出す役割を担ってきた。その長い歴史をたどると、アカデミックな研究活動の舞台の少なかった草創期にはその渇望を満たすための工夫がなされ、この学会は多くの人を集め、成長してきた。しかし、近年は会員数も学会大会の発表数も大きくは伸びてはいない(量的指標自体が必ずしも成長の指標ではないが)。例えば、1951年(第11回)の大会での発表数は110件、2007年(第74回)大会では、104件である。会員数は、1993年936名、2007年1,070名と大きな増はない。相対的に院生会員の少なさもあり、いわば成熟した安定期にあるとも言える。ただし、近年導入した院生企画の募集、補助は一定の効果を生み出していることを勘案するならば、一層の

活性化が図ることができることを示唆している。本学会は心理学全般の領域にわたるものであり、特定領域を基礎として発足した多くの学会とは趣を異にしている。しかし、大会発表件数を学会で設定している領域でごく最近の大会で比較すると、看護、発達・教育、産業・職業が他よりも多く、次いで、社会・文化、人格となっている。しかし、時期によってこの発表数は大きく変動している。一例を挙げるならば、ある時期には多かった交通研究は、関連の専門学会ができた後には大幅に減少している。間口の広い本学会としては、多くのシーズを育て、他の特定領域の学会を生み出してきたと見なすことができる。その上での今後を考えなければならない。

さらに、自己点検をするならば、会員数に比べて、発表者数の割合は決して大きくはない。ここ3年で比べて見るならば、発表者率は、2005年で約10%、2006年で9%、2007年で10%である(他の学会の1例として社会心理学会の場合は約20%)。応心を自分の研究発表の場とするコミットメントの度合いは決して強くはない。

このようなことを踏まえるならばどのような工夫がなされるべきなのであろうか。いくつかの工夫点を挙げてみたい。

1) この学会の歴史、ベテラン会員の多いことを生かす〈知の伝承〉

研究活動の長いベテラン会員が多いことは本学会 の重要な特徴といえる。各人の研究の来し方につい て後の者に伝えることは、本来、どのような社会的 場面でも行われてきたことである。この当たり前の ことを一つの特徴として,大会イベント,会報など での企画を立てることはどうであろう。若手からの 質問に答える形式でもいいし、ベテラン会員が自分 の研究の事始めを語り、その研究はその後どう展開 したのかなどを披瀝し、それに対して、研究テーマ がピンポイントに符合するとは限らないが、若手も 自分の研究の動機、研究の状況を述べる。それを元 にして、双方が互いの述べたことについて意見や質 問をし合うというような「トーク」は他にあまり聴 いたことがない。大学においてもこのような研究の 動機や自分史を学生にきちんと伝えているであろう か。生身の悩める先達の姿を開示することは今の世 の中、むしろ新鮮ではなかろうか。タームとしての 研究法の学習の講義では尽くせない実があると考える。

2) 特定領域にまたがる企画を展開する〈学際性の 追究〉

この学会には, 多様な研究領域の研究者が集って いる。ただ、近年の大会の様子からすると、自分の 研究に近い人が多くはいないので、比較的一方的な 発表をし、そそくさと会場を後にする人が少なから ずいるように思える。それぞれの研究をうまくクロ スして、リンクさせる機会が乏しいのではなかろう か。シンポジウムやワークショップ企画として,異 なる領域の研究者が集い、議論する機会をこれまで 以上に増やすことである。大会時に1,2種類では なく、より多数を取り上げ、強化する(目玉のイベ ントがこれ一つという企画では、それに興味を持て ない会員は参加する動機が高くならないので、でき るだけ多様な領域にまたがる, あるいは, かかわる 企画が必要であろう)。例えば、「食の偽装」のよう な正しく今のテーマを取り上げ、職場組織における 決定システムの観点,消費者行動の目線,企業トッ プの個性, 個人益と企業(組織)益の均衡の観点か らなどのような布陣である。テーマ選びも重要であ ろう。

3) 応用と基礎という位置づけの再検討〈応用・実 践学の基盤強化〉

基礎研究があって応用、実践研究がある。応用さ れてこそ, 基礎研究は活きる。この双方向性の自覚, 啓発は現代大事なことではなかろうか。それぞれ が、どうしても狭い研究領域に身を置いているので は、フットワークも軽快にはならない。研究者の意 識の問題でもあるが、社会に役に立つ、well-being を目指す研究をこれまで以上に志向すべきである。 そのためには、本学会がそれぞれの研究の先にはな にが期待でき、それは、どのように人に役に立つの か(決して,近視眼的な意味ではない)を考える場 であるべきであろう。そのためには、これまで以上 に、基礎的研究と応用、実践する場にいる人との共 同研究の促進、あるいは、学会大会などの場におい て,基礎的研究の成果と,現場で期待していること, 必要なことを照らし合わせるような企画もあってい いのではなかろうか。シンポジウムやワークショッ プの形態もあるが、時には、相応に関連する研究 テーマについての基礎的研究と実践研究をいくつか 発表するセッションを設け、発表後、この意図での 総合討議の時間を今よりは少し長く設定するという ことでも、効果があろう。このような発表のセッ ションを数回でも継続するならば、この学会の特徴 として興味を持たれるものと考えられる。

4) 機関誌,大会プログラムの工夫〈学会活動の相 乗化〉

学会誌に掲載の論文(あるいは複数の論文)を基にして、大会時に、その著者を招き、関連した研究発表者とのワークショップを催すことなどもおもしろいのではなかろうか。学会誌論文と大会時発表とのコラボレーションによる議論である。えてして、学会誌論文と大会発表とは別次元、双方が互いに関連は当然あるものの、やり過ごしてきた向きもあるのではなかろうか。学会の活動の成果は今以上に関連し、互いを活かしていけるではなかろうか。

学会からの情報発信について、他の学会もそうであるが決して上手ではない。現代ではあまりに多様な学会があるのでは、マスコミからすると食傷気味であることは確かであろうが、本学会が、今日的な問題について、応用、実践的に取り上げて研究している姿勢は、大方の関心を得るところである。学会大会の目玉となるような企画や、発表については、マスコミリリースをしていいのではなかろうか。むしろ、積極的に活用することの効用は大きいと思われる。それを契機として、本学会の存在をアピールし、そのことから、多様な応用心理学を目指す人が増えることも期待できるからである。

現象・現場と対峙する

内藤哲雄 (信州大学)

私の専門分野である社会心理学では、現実の社会問題・社会現象・社会行動を研究対象としている。社会心理学の出発点の一つであるル・ボン(Le Bon, G., 1895)の『群衆心理』はフランス革命の観察と論考に基づくものであり、ロス(Ross, E. A., 1908)の『社会心理学』やマクドーガル(McDougall, W., 1920)の『集団心理』に多大の影響を及ぼした。メーデ(Möde, W., 1920)の『集団の心理』の副題は「グループの実験心理学への招待」であり、生産性への集団的影響研究の嚆矢である。著名な社

会心理学者の多くが現実の問題に関心を持ち、独自の仮説や理論を構築し、独自の実証方法を開発してきたことは、アロン夫妻の『社会心理学の心』(Aron, A. & Aron, E. N., 1986 *The heart of social psychology.*) に詳しい。

社会心理学では扱う現象が多様であり、いかなるテーマにも通用する調査や実験は存在しない。そこで、新理論の提唱者たちは、実証方法まで独自に考案しなければならないことが多い。実証方法のヒントは現場の現象にあり、〈参加観察、自然実験〉→〈質問紙調査、フィールド実験〉→〈実験室実験〉と、右に行くほど関与する変数を絞り込む条件統制が厳密となる。取り上げた変数が現象を大きく左右するもの(すなわち決定因)であるか否かは、無限大の変数が関与する現場で確認される。約言すると、現象を大きく左右する変数が決定因であり、決定因を発見し、あるいは決定因であることを確認する最適の場が現場である。また、現場で生じる現象は、変数間の関係を検討する材料や手続きを選定・考案する宝庫でもある。

ところで,工業高校の機械科出身である筆者は, 高校生の時に旋盤での実習を体験した。精度3/ 1000 mm で直径 20.000 mm の丸い棒を製作する となると、まず荒バイト(精度は低いが一気に削れ る) を用いて 20.500 mm 程度まで削り込む,次に 中バイトで削り, 最後に仕上げバイトで丁寧に削っ ていく。別例をあげると、精密機械を据え付けると き、基礎のコンクリートの平面は 5.0 mm 単位の精 度で問題ないだろう。その上に鉄製などの台を据え 付けるときには 0.5 mm 単位でよいであろう。その 上に 1/1000 mm の精度で水平に機械を据え付け る。ある特殊鋼でワイヤー(特殊鋼でできたロープ) を作る場合には、製造過程で強度の誤差が生まれ る。直径1mmを用いての引っ張り検査で破断する のは 30.0 kg 程度で標準偏差は 1.00 kg だとする。 そこで強度を 30.0 kg として, 荷物の運搬には 4 倍 の強度(安全係数4)とし、人が乗る場合には安全 係数7とする、といったように設計する。これらの 例からは, 何を目的とするかによって, 利用する材 料や装置や設計の精度が違うということである。い くら精密に工作できるからといって, 電動鋸で大き く形を整えるべき所を鉋で削り続けるような精密な 工作をしても仕方がない。教室のコンクリート床を 精度 1/1000 mm の平面に仕上げる必要はない。床の高さの違いを mm 単位で有意差検定するかのように、わずかな変動をも大きく増幅する分析法を用いる必要はない。現象の特性を確認もせずに「流行の分析技法」を駆使する研究者が多いのが気になる。

心理学の基礎研究を単純に応用するだけでは、現 場での有効性は期待薄である。間違いではないにし ても,より大きな影響力を持つ要因に阻まれて奏功 しないこともある。トンネル工事でかってない難題 に直面し, 独自の工法と基礎理論を開発していくよ うに,心理学研究者も問題意識を持ち,現場の現象 を観察し、新たな仮説や理論を構築し、実証方法を 考案し, 基礎理論にまで変革をもたらすことが求め られるのではあるまいか。既存の理論や方法、既存 の科学で解明できるものだけが科学なのではない。 現在では自明とされているあらゆる仮説や理論は考 案され、開発されてきたものである。既存の科学で 科学できないものを科学できるようにすることもま た科学である。既存の個々の知識や技術に依存しそ れらを適用(応用)するだけではなく、それらの背 後にあるメタ理論やメタ技法を用いて, 課題に応じ て自由自在に〈心理学する〉という本質・根本に立 ち返ることが求められているのではあるまいか。そ れこそが応用心理学であり, 技法開発や理論構築を もたらす機会となるのであり、現在の日本の心理学 に不足しているように思われてならない。現象や現 場と対峙するフロンティア・スピリットこそが応用 心理学の原点であり、新しい科学を創造する力とな る。応用心理学会には,専門分野を超えた問題解決 型のチーム編成とそのための人材の発掘と開発が求 められる。

心理学の応用はいかにあるべきか

垣本由紀子(立正大学)

はじめに: 応用心理学とは何かという問題をはじめに考える必要があると思われるが、「応用心理学とは、心理学的知見を現実の実践的諸問題に適用する学問」と定義し「実践的な要請がどこまで妥当なものであるかを見極める目を持たねばならない」(坂野、1999、応用心理学ニュースレター)とした

坂野先生の考え方に同意し話を進めたい。

実践的現場は、非常に幅広く、また。同じ現場でも状況により変化し常に同じ状態ではない。しかも実践的現場での課題は、早急に解決することを求められる。「応用」に対し「基礎」が、しばしば対比的に用いられるが、実践的現場では、両者の境は明瞭にできない中で、求められる解決に当たらなくてはならない。さらに、課題解決に当たるためには、現場の仕事内容、システムの理解、組織の理解が必要になる。

事故調査における心理学の応用: ここでは具体的 に、筆者が航空・鉄道事故調査委員会委員として6 年間関わった航空事故および鉄道事故から考えてみ たい。航空事故では原因の7割が操縦者に起因し、 これに整備員, 航空交通管制官, 気象予報官に起因 する事故を加えると、人間側に原因がある場合が8 割になる。原因の解明となると、なぜそのような行 動をとったかの行動分析が必要になり、まさにこれ は心理学の応用領域と言えるのではないだろうか。 事故調査では, 事故そのものを再現したり, 実験す ることはできない上, 当事者である操縦者や運転士 が万が一死亡した場合は, ますます事故の解明は難 しくなる。事故原因究明には,心理学のどの領域と は決め難い。知覚,注意,学習,適性,生理,人格, 組織等のいろいろな領域からの考察が求められる。 一人の応用心理学者でカバーできるというものでは ない。

具体的事例から: 2007年7月25日に公表され た JR 福知山線事故(2005年4月25日発生)を例 に考えてみたい。カーブコーナーで、曲がり切れな かった当該列車は、脱線転覆しながらコーナーに 立っていたマンションに激突し、運転士は死亡、乗 客 106 名が死亡, 562 名が重軽傷を負った。直接の 事故原因は「ブレーキ操作の遅れ」である。なぜ遅 れたのであろうか? この「なぜ?」を追及してい くことがヒューマンファクター的アプローチであ り、人間を中心に人と人との関わり、人とモノとの 関わり,人と作業手順との関わり,人と組織とのか かわりなどを追及することになるが、これはまさに 心理学の応用の場と言える。本事例の場合運転士が 死亡している上、行動の裏づけが取れなければあく までも推定ということになる。いろいろなモデルが あるが, はじめに, 5P (A. Zeller, 1978) を使い, ど

こに問題があるかフォローする。 まず 5P とは,英語の頭文字をとったものである。

- ・Pathological limitation (病理的限界): 運転士 は病的なものはなかったかどうか。SAS(睡眠 時無呼吸症候群)も含まれる。健康体であるか 病気であるかによりその後の方向性が変わって くる。身体歴、健康診断歴から健康体であった と推測。病的な要因は排除される。
- Physiological limitation (生理学的限界): 疲労, 睡眠不足など。
- Psychological limitation (心理学的限界): 注意,経験,適性,人格,情緒など。
- Physical limitation (身体的限界): 人とモノとの関わり、視力など。
- ・Psychosocial limitation (社会心理的限界): 組織と人との関わり。これらの関わりがどこに あるかを推測し、さらに行動の裏づけを探しな がら可能性を組み立てる。

おわりに: 工学的分野は、推定の裏づけとする物証は豊富に存在する。物証のない心理学的推測は、工学分野から非難を受けることもあるが、確率的に過去の研究から見えることは「推定」や「可能性」であっても積極的に積み重ねていくことが必要と考えている。この事例のアプローチには、基礎とか応用を超えて、総合的に果敢に取り組むしかないと考える。心理学の応用分野として事故調査は肥沃な領域と言えるのではないかと考えている。

心理学のさらなる応用を期待して

細江達郎 (岩手県立大学)

各話題提供者の報告は芳醇であり、応用心理学・ 学会の方向に示唆的である。2,3 感想を述べる。

「科学的厳密性」と応用:推計学的な結論は純粋事例・単独要因を想定しているとのこと(大村先生)で、現実場面の事態の発生は多様な要因が輻輳する(垣本先生)ので、別な方法視点が必要かと思う。「科学的な厳密性」を求めて心理学者は踏み込まず、禁欲的であることは科学者の姿勢として評価はできるが、現実の状況のなかでは他分野の研究者がかなりアバウトに「心理学的解釈」を相当やっていることに対応できていない。最近現実課題で他分野との

特 集 (173)

連携が多くなっている。心理学者にかかわらず学者は結果のレベルを非常に完璧なものを期待する。しかし応用面からいえば一つでもうまくいけばいいというレベルである。そのあたりが応用を考える視点でもあるのではないか。この点で精度のレベルが違うという内藤先生の指摘はもっともなことである。課題の性質に応じて相応しい接近単位や大きさが必要である。細かい分析をするから正確であるというのは間違いで、どこにも相応しいレベルがある。そこを中心により細かいミクロに、またよりマクロなものが出てくる。その両者を見る。応用研究ではそれは現場での要求のレベルへの対応が重要である。

柔軟な多面的折衷的方法をとる必要性:一つの方法だけでいいことはない。心理学の他の方法,また他の科学の方法を柔軟にとることが特に応用課題では求められる。応用場面ではかなり他分野の専門家がアバウトに心理学を利用している。災害研究などでもともと物理・工学研究者が,災害場面をたくさん見て,"研究していく"うちに,相当心理学的知見を蓄え,心理学的な説明をする。それでも相当役立つのが現実である。心理学者はもう少し踏み込んでもいいのではないかと思う。

テストの標準化・厳格性による隙間テストの横 行: 大村先生が指摘のテストの賞味期限のことは留 意すべきと思う。標準化のたいへんな手続きが必要 ということで対応しない弊害は少なくない。この間 隙をぬってポップ心理学, 週刊誌心理テストがさら に似非科学的心理学がはびこり, これが心理学のイ メージとして特に若者に浸透し、心理学教育にも悪 影響を与えることとなる。心理学の柔軟な応用も必 要であるとともに、一方誤った応用のされ方にも警 鐘する必要がある。筆者はテストの標準化という視 点にこだわるよりは、心理学本来の個人自体の枠組 みをそのまま把握することから、そうしたテストを つくればと考え、暗黙の人格観テスト (IIPT) を開発 している。内藤先生の PAC 分析も同様な視点かと 思う。内藤先生の方向は心理学の学問的にもまた応 用の面からも大いに意義ある取り組みと思われる。

概念を設定する心理学とその普及:心理学は「概念」を設定する学問であるといわれている。概念はソフトであり、思考で共有するものなので、実は心理学者が開発したものでも、すぐ普通の人に普及してしまう。したがって開発した概念はすぐ常識化さ

れるだけでなく、誤って理解されることがある。心理学が提供してきた概念、さらにその背景となるさまざまな人間観は多くの人々の常識の中に入っている。その影響あえていえば応用的影響は相当なものである。したがってそうした概念やその背景をしっかりと伝えていくことはたいへん重要である。大学での心理学の講義や一般の人に心理学の成果を伝える場合、常に正確に伝える義務がある。筆者が「しろうと理論」*に関心のあるのはそうしたところにある。

心理臨床の教育の課題:大村先生の心理臨床の教育に対しての指摘は肯定すべきところ多い。心理学の応用という面では矯正部門の犯罪研究は先導的であり、多くの研究が行われてきた。近年は臨床心理学へ需要と関心の増大により、心理学の応用についてさまざまな課題が出されている。臨床心理学の場の課題は緊急的なものが多いが、その教育にはまさに広範な心理学の基礎知識と人間観に基づいた上での、応用的実務的な技法の確実な修得が求められる。

まとめ:心理学の応用に関しては、科学論としての認識科学 VS 規範科学、基礎科学 VS 応用科学という枠組みを超えて、現場主義、問題主義からの発想をもつ必要がある。日常的な現実の中に科学的真理があるという逆の視点が求められる。心理学的な概念や成果は対象が人間であるということ含め、社会構成的産物である。科学の客観主義や原理主義は重要だが、もともと社会状況的産物であることを柔軟に考えるべきである。心理学分野では応用課題に関して集中的に資金や人材を投入していく仕組みが必要かと思う。心理学者は応用理論を正確に自信をもって一般に発信していく努力が必要である。

*A. Furnham (細江訳) しろうと理論 北大路書房

応用心理学への期待

林 潔(白梅学園短期大学)

応用心理学の研究を続けていく際の基本的な事柄 について、先生方からご示唆を頂き、ありがとうご ざいました。

今日の心理学研究は、推計学の手続きに依存する ところが大きい。しかし大村先生も指摘されたよう

に、判断に無理があることも現実である。推計学的 技法の意味は尊重しながらも、それとともに他のア プローチも、心理学研究法としての共通理解を得る 余地はないであろうか。もしありうるとしたらどの ようなアプローチを考えることができるか、お伺い できればと思う。

心理テストの標準化には膨大な労力と費用がかかる。そのためになかなか改訂が難しい。そのことは理解できるとしても、例えばかなり以前に作成された質問紙には、現在の若い人が理解しにくい言葉も出てくる。下手をするとその言葉を自分なりに本来とはずれた意味で解釈をして質問紙に反応し、その結果が集計されることがないとはいえないであろう。

次に教育プログラムの問題がある。過去には学部の教育は、基礎に徹するとした大学もあったと伺っている。しかしこのようなカリキュラム構成は、現在では難しくなっているのだと思う。特に大学院では、学部で心理学を専攻していない人たちも入学してくる。幅広く人材を求めるということはよいとしても、修士課程の場合これでは2年間で心理学の基礎と、それに基づく大学院レベルの教育、さらに特定の資格につながる訓練が並行することになる。知識は積み上げだとすると、これには無理が伴わないであろうか。したがって、例えば心理学あるいは周辺領域の専攻外の入学者の場合には、少なくとも入学の半年あるいは3カ月前から、いわば予科教育として心理学の基礎教育のカリキュラムを組むという構想はいかがであろうか。

内藤先生のご発言について。現実は理論どおりいかない、教科書どおりいかないという言い方はよく耳にする。そして、だから理屈など役に立たないと飛躍する。現場で、問題や課題に追われている方々は、時にはそう言いたくなるのであろう。基礎理論をどのように現実の課題解決につなげるか。なまの生活の中、動きつつある生活の中で問題や課題を追及し、理論設定をしていく場合には、基礎理論を設定する際のようなかたちでの統制条件の設定ができないか、できにくい。そのために統制条件における理論設定と同じ次元で考えると、苦しいところがあ

る。もちろん、心理学はぎりぎりのところまで、実験による実証的な手続きが用いられる必要があると考える。しかしこのような手続きを用いにくい、現実生活のただ中で問題と課題解決を考えていこうとする場合、理論構成として用いることのできる手続きについての示唆を頂ければと思う。このことが、応用を意図する心理学の基本的なテーマとなってくるのではなかろうか。

垣本先生のご発言に対して。応用心理学の定義についてはおっしゃるとおりと思う。応用心理学の役割は、基礎研究の知識を現実、特に問題解決を求められている課題に適用し、またそこで得られた成果をフィードバックし発展するという営みと理解している。

そこで事故についての問題であるが,これは特定 のできごとに対するものではなくて,あくまでも一 般論として申し上げたい。

ハーバードのオールポートが Psychological models of guidance (Harvard Educational Review 1962年)の論文で、生成の過程における人間―― 意志をもって生きていこうとしている人間の課題と して tentativeness と commitment ということを 述べている。教育心理学の沢田慶輔先生はこの言葉 を試案性と専心従事と訳された。現実には完全に確 かなものはありえない。したがってさまざまな知識 はテンタティヴである。しかしそのなかでより確か なものにコミトメント――信頼して生きていくとい う態度を意味している。人間は過ちを犯す。完全な ものを目指すのは必要だとしても、現実には完全と いっても相対的なレベルでしかない。現実にはそれ を前提として生活せざるをえない。とすれば故意の 場合は論外として、事故の予防に比重を置くという 観点から、免責を条件に事故原因を探っていくとい う土壌がそろそろわが国でも形成されていくほうが よいのではないか。予防的な観点から、そのような 啓蒙活動を進めていくことも意味があると思う。

心理学の応用はいかにあるべきか。特に理論的構成の方法論の形成について,今後も応用心理学会として討議が続けられ,その間にモデルが提案され,現実の変革に適用されていくことを期待したい。